

|||||
研究報告
|||||

小児看護学実習時におけるテーマカンファレンスによる 学生の学びと課題

School of Nursing Students' Theme-Conference Learning Assignments in Child Nursing Practicum

小口 多美子 越雲美奈子
Tamik Oguchi Minako Kosikumo

獨協大学看護学部
Dokkyo Medical University School of Nursing

要 旨 小児看護学実習時に4つのテーマカンファレンスを実施した。カンファレンスのテーマの有効性と学生の学びを明らかにすることを目的とし、学生による評価を自作の評価表と自由記述の意見により求めた。評価項目は12あり、1～4点で採点し、平均点を集計した。38名の回答があり、4つのテーマの各12項目の平均点数は3.6点以上であった。その内、評価点が高かったのは、＜発言しやすい＞＜メンバーとの学びが共有できた＞＜受け持ち患者の理解につながった＞＜話し合いの後でやる気が出た＞など、グループ活動に関するものであった。しかし、＜自分の考えに自信が持てた＞＜困っていたことの解決案を考えることができた＞＜自分のケアの評価につながった＞＜自分にはあまり役立たなかった＞等の学生個々の持つ問題解決には結びつかなかった。次に自由記述では合計57コードが得られ、＜発言しやすい＞＜看護計画の参考になる＞＜他の学生と学びが共有しやすい＞＜教員の助言が理解しやすい＞＜運営が良い＞＜適切なテーマである＞の7つのカテゴリが得られた。これらの評価と意見から、テーマを提示し、教員による講義形式のカンファレンスは学生にとり参加しやすいものと支持を得たが、個々の学生の問題解決には他の方法を活用する必要があることが明らかになった。

今後の課題は、テーマの計画書の推敲、評価表の開発、そして学生の具体的なカンファレンスの効果の検証である。

キーワード：テーマカンファレンス、小児看護学実習、看護学生、課題

Keywords : Theme conference, Child Nursing Practicum, Nursing Students, Assignment

I.はじめに

看護学は実践の学問であり、知識として理解した内容を実践に活用可能なレベルまでに進化させる必要がある。そのため、基礎看護学教育には看護学実習が授業として設定されている。看護学実習は、対象者と学生の相互行為の過程を通し、援助専門家としての実践能力を修得する

ための学習である¹⁾。この実践能力の向上が、看護学教育における学士課程の課題で有ると指摘されている²⁾。その背景には現在の高度化された医療や、重症患者の割合の増加、患者の安全の確保や権利意識の向上等がみられる医療環境において、高度なコミュニケーション能力と、看護ケアを提供できる能力が求められているた

めである³⁾。一方看護学生は、看護職になるという動機付けはあるが、社会性が乏しく経験も少ない中、膨大な専門知識を修得するとともに、実践能力となる技術を修得するには多くの努力が必要である。

小児看護学においても、患者の入院日数の短縮化や、感染症の患者の減少等により、受け持ち対象の患者が少なくなっている。さらに、保健師助産師看護師学校養成所指定規則で決められている90時間の小児看護学実習時間は、患者の理解と看護援助を実践することと、理論を導き出すためには、十分な時間とは言えない。

この小児看護学実習における限られた時間と学生の状況を考え、我々は、学習目標達成を支援するために、看護学実習カンファレンスの運営を効果的にすることが重要であると考えた。看護学実習カンファレンスは、実習目標達成を目指して教員と複数の学生が相互行為を展開する授業形態である。カンファレンスには、学生がテーマを出し司会をする学生によるカンファレンスがある。この方法において、学生は必要性を理解しても、否定的な印象を持つことや苦手意識をもつことが報告されている⁴⁾。また、テーマの選択に時間がかかることや、十分に準備されたテーマでない場合、話し合いにならず、沈黙することが多いという報告^{5) 6) 7)}もある。そこで、我々は教員が決めたテーマを提示したカンファレンスを実施した。そのテーマとして、学生がどのような疾患や病状、年齢にある小児を受け持つ場合にも共通して価値がある内容とした。それにより、学生が考えをめぐらすことや発言することに集中することができると考え、進行は教員がすることにした。

過去の文献では、テーマを設定し計画書を作成して実施した小児看護学実習の報告が1件挙げられた⁸⁾。カンファレンス実施後の学生の意見を分析したものであり、テーマへの学びがあったことが報告されている。また、成人看護学実習に於いて島田⁹⁾は、テーマを提示しない群と提示した群の学生の学びを比較している。その結果、テーマの提示した群の方が学びの内容が多いと報告している。この報告の中には指導書

や時間等の詳細な情報は記載されていなかった。これらを参考にし、我々は4つのテーマを決め提示し、2か所の病棟で2人の教員がそれぞれ実施した。

今回は、テーマカンファレンスの実施後に、質問紙調査を行い、学生の学びと提示したテーマの設定の有効性を明らかにする。

II. 研究目的

小児看護学実習時の、テーマカンファレンスについて、提示したテーマの設定の有効性、学生の学びを明らかにし、今後のカンファレンスの基礎資料とする。

III. 方法

1. 期間：平成22年12月～23年2月。
2. 対象：A看護系大学3年次学生38名。
3. 方法
 - 1) 実習指導教員2名(B・C)がテーマについて計画書を作成した。
 - 2) テーマカンファレンスを実施した(表1)。4つのテーマは、①発達段階を考えたケアの提供をどのようにしてゆくか。②入院している時の危険防止・安全は守られているのか。③入院している児にとっての遊びの援助はどのように考え、実施するのか。④家族への援助はどのように考え、実施できるのか、とした。
 - 3) 実習の全日程終了時に自作の質問紙と自作のカンファレンス評価表を渡した。
 - 4) カンファレンスの評価表には、舟島¹⁰⁾らが作成した尺度があるが、教員の自己評価表であり我々の意図する尺度が見当たらなかった。そのため、研究者が独自に作成した。質問項目は合計12項目(表2)とした。その内、学生自身に関する問いを9項目設定した。それらは、「受け持ち患者の理解につながった」「困ったことの解決案を考えることができた」「話し合いの後でやる気が出た」「自分の話を聞いてもらえて安心した」「他の患児を見る時の視点が理解できた」「自分にはあまり役に立たな

表1 カンファレンスの日程とテーマ

	20分
1日目	テーマカンファレンス 発達段階を考えたケアの提供をどのようにしてゆくか
2日目	テーマカンファレンス 小児の危険防止・安全は守られているか
3日目	
4日目	テーマカンファレンス 入院している児への遊びの援助はどこまで可能か
5日目	家族への援助はどのようにできるのか

かった（逆転項目）」「患児との対応を振り返ることができた」「自分のケアの評価につながった」「自分の考えに自信を持つことができた」である。さらに、グループでの話し合いの効果を知る項目では「発言がしやすかった」「メンバーとの学びが共有できた」「皆で話し合うことではないと思った（逆採点項目）の3項目とした。それらの点数に○をつけてもらった。1点：全くそう思わない、2点：そうは思わない、3点：そう思う、4点：とてもそう思う、の4段階リッカート式とした。逆採点項目は集計時、点数を変換した。

5) 2つ目の質問は、「カンファレンスを実施しての考え」を自由に書いてもらう自由記述とした。

6) 分析：分析は統計ソフトSPSS version17.0 for windowを使用した。評価表は単純集計し、2名の教員の比較は4つのテーマの各12項目のt検定をした。次に、自由記載の回答はベレルソンの内容分析の手法を用いた¹¹⁾。まず、1学生の記述を、「テーマのあるカンファレンスを実施しての意見」について、文脈を損ねないように1文1義をコードとした。次にコードの意味内容の類似性に基づき分類し命名した。信頼性の確保のため、看護系大学教員2名に分

析を依頼した。

IV. 用語の定義

1. 看護学実習 (nursing clinical practicum)¹²⁾

看護学実習とは、学生が既習の知識・技術を基にクライアントと相互行為を展開し、看護目標達成に向かいつつ、そこに生じた看護現象を教材として、看護実践に必要な基礎的能力を修得するという学生目標達成を目指す授業である。

2. テーマカンファレンス (theme postconference)¹³⁾

カンファレンスとは、教員が看護実践場面における教授活動や学生の学習活動を前提とし、実習目標達成を目指して複数の学生と相互行為を展開する授業形態である。そして、本研究に於いては、実習開始時に教員がテーマを提示して行うカンファレンスを、テーマカンファレンスとする。

3. 教員 (faculty)¹⁴⁾

教員とは、看護学実習という授業の中で学生の実習目標達成を目指して教授活動を展開する教授主体であり、看護基礎教育機関に所属するものである。

V. 倫理的配慮

獨協医科大学看護倫理委員会の承認を得た。実習開始時に、実習カンファレンスは、決め

られたテーマで教員が司会を行い20分間行うことを伝えた。次に、実習終了時質問紙によるアンケートをすることの同意を得るため、同意書を交換した。書面には、研究目的、参加の自由性、途中で拒否をしても実習成績等に何ら不利益を被らないこと、評価表とアンケートは無記名であること、データは統計処理し個人を特定できないようにすること、連絡先を記入した。その2週間後の小児看護学実習終了時に、カンファレンス評価表と自由記載用紙を配布し、鍵がかかる回収箱にて、自由な時間に投函してもらい回収した。データはUSBに保存し、鍵のかかる引き出しに保管した。

VI. 結果

学生38名の同意が得られた（有効回答100%）。

1. 評価表によるカンファレンスの評価（表2）

4つのテーマの評価の視点の12項目の平均得点は全て3.6点であった。4つのテーマ全てにおいて平均より高い評価の視点の項目は9項目あり、その内、8項目はポジティブな評価の項目であった。それらは、＜発言しやすい＞＜メンバーとの学びが共有できた＞＜受け持ち患児の理解につながった＞＜話し合いの後でやる気が出た＞＜自分の話を聞いてもらえて安心した＞＜他の患児を見る時の視点が理解できた＞＜皆で話し合うことではない（逆採点項目）＞＜患児との対応を振り返ることができた＞であった。

次に、平均3.6点未満の評価の項目は、テーマ1では5項目であり、テーマ2と4では4項目、テーマ3は3項目であった。それらは、＜困っていたことの解決案を考えることができた＞＜自分の話を聞いてもらえて安心した＞＜自分にはあまり役立たなかった＞＜自分のケアの評価につながった＞＜自分の考えに自信を持つことができた＞であった。

さらに、12の項目は、グループ活動としての評価項目の3項目全てで3.6より高かった。そして、学生自身を評価する9項目の内4項目は3.6以上あり、5項目は平均以下であった。そ

れらは、＜困ったことの解決案を考えることができた＞＜自分にはあまり役立たなかった＞＜自分のケアの評価につながった＞＜自分の考えに自信を持つことができた＞であった。

次に、2名の教員の4テーマの各評価の12項目におけるt検定の結果は、全て差はなかった（表3）。

2. 自由記述の結果（表4）

自由記述のコードの意味内容の類似性に基づき分類命名し、看護大学の2名の教員によるスコットの一致率を算出した。その結果各教員は71%と86%の一致率を得、信頼性を確保した。

合計57コードが得られ、7つのカテゴリに大別された。以下にカテゴリは『 』、コードは「 」で表す。

1つ目は『観察点やケアの視点が理解しやすく、看護計画に参考になる』11コード（19.2%）であり、そのコードには、「テーマがすぐに実習に役立つ内容であり、アセスメント、計画、評価にとっても役立った」や、「テーマカンファレンスがあったことで、発達段階、遊びなどの観察ポイントの視点が広がったのでよかった」等であった。

2つ目のカテゴリは『適切なテーマである』10コード（17.5%）が挙がり、コード内容は、「多くのことを学ぶことができるので良いテーマであった」、「小児看護の特徴となるテーマであったため、実習に生かすことができるものになったと思う」等であった。

3つ目のカテゴリは『他の学生と学びを共有しやすい』9コード（15.8%）であり、コード内容は、「実際に関わり気付いたこと等の情報交換ができた」、「他の学生と学びの共有ができたので良かった」等であった。

4つ目のカテゴリは『討議がしやすい』8コード（14.0%）であり、コード内容は、「カンファレンス自体を先生が上手に進行してくれたので発言しやすかった」や、「テーマが決まっていると意見が出しやすく良いと思った」等であった。

5つ目のカテゴリは、『テーマカンファレンスの運営が良い』8コード（14.0%）であり、コー

表2 決められたテーマのあるカンファレンスに関する学生による評価

とてもそう思う:4 そう思う:3 そうは思わない:2 全くそう思わない:1

カンファレンステーマ 評価の視点		1	2	3	4	平均
		ての発 ゆ提達 く供段 かを階 どの考 よえた にケ シア	い防入 る止院 の・し か安て 全い はる 守児 らの危 れ危 て険	のよて入 かうの院 に遊し 考びて えのい 、援助 実助 施は すど るのつ	のう家 かに族 考への 、援助 実助 施は どの きよ	
活動の グループ の視点	1. 発言がしやすかった	3.7	3.8	3.7	3.6	3.7
	2. メンバーの学びが共有できた	3.9	3.9	3.9	3.8	3.9
	7. 他の患児をみる時の視点が理解できた	3.9	3.8	3.8	3.8	3.8
	9. 皆で話し合うことではないと思った	3.6	3.7	3.6	3.7	3.7
学生自身の 視点	3. うけ持ち患者の理解につながった	3.7	3.9	3.8	3.8	3.8
	4. 困っていたことの解決案を考えることができた	3.3	3.3	3.4	3.3	3.3
	5. 話し合いの後でやる気が出た	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6
	6. 自分の話を聞いてもらえて、安心した	3.5	3.5	3.6	3.6	3.6
	8. 自分にはあまり役に立たなかった	3.5	3.6	3.5	3.5	3.5
	10. 患児との対応を振り返ることができた	3.7	3.7	3.7	3.6	3.7
	11. 自分のケアの評価につながった	3.5	3.5	3.6	3.5	3.5
	12. 自分の考えに自信を持つことができた	3.0	3.1	3.0	3.0	3.0
平均		3.6	3.6	3.6	3.6	3.6

※8. 9は逆採点項目

ド内容は、「最初に先生からのテーマで話し、その後自分達のテーマで話す方針は良いと思う」、「テーマが決まっていると、資料など持ってきたり準備しやすい」等であった。

6つ目のカテゴリは『教員の助言が理解しやすい』6コード (10.5%) であり、コード内容は、「皆で自分の意見を出しあった後、経験者である先生から助言等をいただいたので分かりやすく知識が増えた」や「資料を読むだけではなく

それについてのエピソードや説明をしてくれて参考になった」等であった。

7つ目のカテゴリは『テーマが実習の進度に合っている』で、コード内容は、「順番も段階を経てレベルアップしていてちょうど良かった」、「実習日時に合ったテーマであり、とても考えさせられた」等であった。

表3 決められたテーマによるカンファレンスへの学生の評価,教員B,Cの平均値の比較

カンファレンステーマ		1		2		3		4			
		ゆどた発 くのケ達 かよア段 うの階 に提を し供考 てをえ	る全の入 のは危院 か守険し ら防て れ止い て・る い安児	すうのに入 るに援と院 の考助っし かえはてて 、どのい 実の遊る 施よび児	のえど家 か、の族 実よへ 施うの でに援 き考助 るは						
評価の視点		教員別		B		C		B		C	
		B n=20	C n=18	B n=20	C n=18	B n=20	C n=18	B n=20	C n=18		
活動の視点	1. 発言がしやすかった	3.7	3.7	3.8	3.8	3.6	3.7	3.6	3.7		
	2. メンバーの学びが共有できた	4.0	3.8	4.0	3.9	3.9	3.8	3.9	3.8		
	7. 他の患児をみる時の視点が理解できた	3.9	3.8	3.8	3.8	3.8	3.7	3.9	3.7		
	9. 皆で話し合うことではないと思った	4.0	3.8	4.0	3.9	3.9	3.8	3.9	3.8		
学生自身の視点	3. うけ持ち患者の理解につながった	3.7	3.8	4.0	3.8	3.8	3.8	3.9	3.7		
	4. 困っていたことの解決案を考えることができた	3.4	3.4	3.3	3.3	3.4	3.4	3.3	3.3		
	5. 話し合いの後にやる気が出た	3.6	3.6	3.4	3.7	3.5	3.7	3.6	3.7		
	6. 自分の話を聞いてもらえて、安心した	3.5	3.4	3.4	3.6	3.5	3.6	3.5	3.6		
	8. 自分にはあまり役に立たなかった	3.4	3.7	3.5	3.7	3.4	3.7	3.4	3.7		
	10. 患児との対応を振り返ることができた	3.6	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.6	3.7		
	11. 自分のケアの評価につながった	3.5	3.5	3.5	3.6	3.5	3.6	3.4	3.6		
	12. 自分の考えに自信を持つことができた	3.0	2.9	3.3	2.9	3.0	3.0	3.0	3.1		
平均		3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6		

※8. 9は逆採点項目

Ⅶ. 考察

小児看護学実習の学習目標達成を支援するために、効果的な看護学実習カンファレンスが必要であると考え、4つのテーマカンファレンスを設定し実施した。このカンファレンスにおける教員行動の説明概念は、中山らの命名による「教授技術複合活動による看護現象解説と原理への統合」である¹⁵⁾。この概念は、「実習目標達成を目指し、多様な教授技術を組み合わせて使いながら、学生が観察・体験した看護現象を看護学の本質や法則に照らし合わせて解説し、統合する教員の行動」と説明されている。さら

にこの方法は、学生が体験した具体的な、流動的な現象を専門性の高い看護学の原理と関連付けるために抽象化する、そして抽象から具象へと思考活動をする授業と説明されている。学生は、小児との関わりによる現象の意味することや、看護理論の理解等の思考活動を短時間で行うのは困難なことが多い¹⁶⁾。そこで、それらを共通理解することにより、患者をより深く理解することができると考え実施した。

それに対する学生の評価によりテーマの妥当性、教員の司会の有効性、時間設定、テーマカンファレンスの不足な点、計画書の有効性につ

表4 4つのテーマカンファレンス実施後の学生の意見

カテゴリ	内 容	コード数 割合
1. 観察点やケアの視点が理解しやすく、看護ケアの参考になる	どこに視点を当てればよいのか明確になるので良かった。	11 (19.2%)
	自分の理解が薄いところが分かり、とても勉強になった。また、観察点が分かった。	
	テーマがすぐに実習に役立つ内容であり、アセスメント、計画、評価にとっても役立った。	
	「安全」や「遊び」など毎回看護展開がしやすくなるようなカンファレンスをして、計画をたてやすかった。	
	それぞれのテーマについて話せたことで、実習していてどのようなところに目をむければ良いのか、どう関わればよいのか分かりよかった。	
	テーマがあったことで、発達段階、遊びなどの観察ポイントの視点が広がったのでよかった	
	小児実習で見る視点、方向性が分かったので実習に弾みがついた。	
学習不足の部分を補うことができた。		
2. 適切なテーマである	考えさせられるテーマだった。	10 (17.5%)
	多くのことを学ぶことができるので良いテーマだと思った。	
	適切なテーマであった。小児で重要なことであったためよかった。	
	小児看護の特徴となるテーマであったため、実習に活かすことができるものになったと思う。	
	小児で実習するに当たり必要のある学びであり、それに対して病棟での実際を学んだことも踏まえ、話し合うことができ、より良い学びにつながった。	
	その日実習で体験したことを話し合うことができるテーマだったのですごく勉強になった。	
適切なテーマであった。小児で重要なことであったためよかった。		
3. 他の学生と学びを共有しやすい	この実習に必要なテーマだと思ったので、ケアや問題点を考える時など、他の人の意見がとても参考になった。	9 (15.8%)
	皆で考えることで理解につながった。	
	病棟実習に適したテーマカンファレンスを行い、他の学生と学びの共有ができたので良かった	
	実習に必要な知識などの再確認や事例からの学びを共有することができ有意義な時間であった	
	実際に関わり気づいたことなどの情報交換ができた	
テーマを皆で話し合うことで他の人の事例や考えを聞くことができたため、とても良かった		
4. 討議がしやすい	カンファレンス自体を先生が上手に進行してくれたので、発言しやすかった。	8 (14.0%)
	話しやすい場であったので質問しやすかった。	
	焦点を絞って考えられたので良かった。	
	テーマが決まっていて発言しやすかった。	
テーマが決まっていると意見が出しやすく良いと思った。		
5. テーマカンファレンスの運営がよい	なかなか学生間だと無意味なカンファレンスになることが多々あるので、ああいうテーマがあると学びになった。	8 (14.0%)
	最初に先生からのテーマで話し、その後自分達のテーマで話す方針は良いと思う。	
	毎日その時にあったテーマを提供してくれてよかった。	
	自分では気づかない点もあるので、テーマカンファレンスの方が進めやすく、得るものがあった	
テーマが決まっていると、資料などを持ってきたり、準備しやすい。		
6. 教員の助言が理解しやすい	皆で自分の意見を出しあった後、経験者である先生から助言等をいただいたので分かりやすく知識が増えた。	6 (10.5%)
	毎回テーマを提示してくれて、学生一人ひとりの意見に対するアドバイスをもらえた。	
	自由に話し合った後、助言や注意をもらえ、考えを受け止め修正をもらえ、充実していた。	
	先生の助言も参考になった	
7. テーマが実習の進度に合っている	実習日時にあったテーマであり、とても考えさせられた。	5 (8.8%)
	テーマが実習の進度にあっていて良かった。	
	順番も段階を経てレベルアップしていてちょうどよかった。	

いて明らかになった点を考察する。

まず、テーマの妥当性は、評価項目の〈受け持ち患者の理解につながり、小児との対応を振り返ることができた〉、〈受け持ち患者の理解につながった〉の項目において高い評価を受けた。また記述文をまとめたカテゴリの中の『適切なテーマである』や『テーマが進度に合っている』からも評価を得たと推察される。さらに、評価項目〈発言がしやすい〉の高い点数と、カテゴリの『討議がしやすい』からもテーマの設定は良いと評価を得たと推察される。小児看護に重要な点として4つのテーマを挙げたが、他に考えられるテーマとしては、学童期の学習の援助、プライバシーの保護、家にいる同胞への支援、病院の食事が食べられない児への援助、重症心身障害児とのコミュニケーション等である。それらをテーマとして実習のいつの時期に行うのが効果的なのかを検討する必要がある。

次に、教員が司会を行うことの有効性についてである。評価項目の内、グループとしての話し合いに関する項目は高点であった。それは、〈発言しやすい〉や〈メンバーの学びが共有できた〉等である。はじめに述べたように学生が司会をするカンファレンスでは発言がなく難しいという報告が多い。今回はメンバーの意見を聞くことも、自分の発言もでき、〈話を聞いてもらえて安心した〉と思えたのではないだろうか。さらに、カテゴリの『他の学生と学びを共有しやすい』ことから、グループとしての学びができたと言える。学生は自分の考えや思いを相手に分かるように伝えること、リーダーシップをとって相手の意見を引き出すということは難しいという報告もある¹⁷⁾。その集団討議を阻むものを川本¹⁸⁾は①自己表現をしない文化をもつ日本の国民性、②public speaking教育の有無、③若者のコミュニケーション形態の変化、例として自分が傷つかないようなメールの多用、④コミュニケーション能力の不足傾向¹⁹⁾等を挙げている。そのため集団討議の活発化には、自分の思いを話すことができる体験が必要であると考えられる。また、自我同一性獲得に近いほど、学生はカンファレンスでの学びも多

いと齋藤²⁰⁾は述べている。看護学実習では学生が、患者、家族、教員、指導者、担当看護師等との人間関係に戸惑いを感じることもある。あるいは自己否定に陥り、自己喪失の危険性のある授業であると言われている²¹⁾。それとは反対に患児の家族からの感謝の言葉や患者の疾病の回復を体験することは、自己の存在の価値を確認するという自己同一性の獲得にも結び付く可能性のある授業である。その点では、教員が司会をすることは学生の実践と理論を結びつけ、現象が意味あることであることに気付かせることが可能である。そのようなカンファレンスは、学生の自己同一性を獲得する可能性を含み、より深い学びが得られる場であると示唆された。

さらに、カンファレンスにおける学生の沈黙について、川島ら²²⁾は様々なタイプがあると述べている。その中の〈考えている時の沈黙〉〈意見を言うのをとりあえず保留して、他人の意見を聞こうとしている沈黙〉は肯定的な沈黙であり、学生の発言を待つことが重要であると言われている。この沈黙の意味を教員が理解し支持することにより、学生は自己の存在の価値を確認する可能性が高く、その点から、教員が司会をすることに意義があると推察された。

3つ目に、時間の設定は20分であったが、記述文で「学生が自由に話し合える時間もちょうど良い」や、土井²³⁾による30分での実施報告等から妥当であると言える。また、60分の中でテーマカンファレンスだけではなく、学生の受け持ちの患者看護に関しての発表と討議を行うためには、20分は妥当であると示唆された。

4つ目に、テーマカンファレンスの不足な点である。評価の低得点項目は、〈学生自身の患児ケアの解決には参考にならない〉であった。言い換えれば、小児のいくつかの側面の理解は深まったが、自分が受け持ち実施しているケアで困っていることの解決はできなかったといえる。この点の解決には、事例紹介の時間にグループのメンバーや指導者と共に考えること、面接を行うこと、教員がケアを一緒にいりモデルを示すこと、あるいは看護師や他職種の人との話

しをすること等、多様な方法が必要であると示唆された。

5つ目に、計画書の有効性である。今回は、2名の教員が計画書を基にカンファレンスを実施したが、t検定の結果に差は無かった。その要因の一つに計画書が適当であったと考えることができる。しかし、計画書については、学生の発言をどのように取り上げてゆくか等に関して今後さらに検討が必要であることの示唆を得た。

VIII. 結論

小児看護学実習に於いて、実習開始時にテーマを提示し、教員が司会をするテーマカンファレンスを実施した。それに対する学生の評価と意見の記述から以下の示唆を得た。

1. 設定した4つのテーマは学生全員が共有してほしいと考えたテーマであり、有意義であると学生に支持された。
2. 教員が司会をすることは、学生の発言を促し、他の学生と学びを共有しやすい場となった。
3. テーマカンファレンスは、学生には自分の受け持ち患者の理解と、グループの他のメンバーの受け持つ患者の理解に有効であった。しかし、自分の看護ケアで困っていることの解決策にはあまり結びつかなかった。この不足の点に対して、学生個々の目標達成状況に応じて、事例検討、面接指導、ケアを一緒に行いモデルを示すこと、臨床の看護師からの助言を得る、記録の指導をする等多様な教授方法が必要であると示唆された。
4. 計画書は2名の教員が行うのに有効であったが、さらなる検討の必要性が示唆された。
5. 今後のテーマカンファレンスの課題は、①各テーマの計画書の推敲が必要であり、実習目標達成に効果的な計画書の作成の検討が重要である。②学生が、カンファレンスで学んだことを小児の理解や看護ケアにどのように反映したのかは、今回の調査では判断できず、学生個々の実践と学びの過程

をみる必要がある。③カンファレンスの評価表の開発が必要である。④さらに多くの学生に実施し、より妥当な評価を得なければならないことの示唆を得た。

謝辞

この研究に協力していただいたA看護系大学の学生の皆様に、深謝いたします。

引用文献

- 1) 杉森みど里：看護教育学第3版：医学書院, p274, 1999.
- 2) 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告：大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会, p14, 2011.
- 3) 前掲2)
- 4) 濱本由美子：有意義で意味のあるカンファレンスに影響する要因－学生のアンケート調査より－, 大阪医科大学付属看護専門学校紀要,第8号, P27-35, 2002.
- 5) 市江和子：看護学実習カンファレンスにおける学生の学びと指導の課題－小児看護学実習での学生へのアンケート結果, 看護教員と実習指導者, 2 (2), 2005.
- 6) 藤井ユリ子：看護学生がグループワークで感じる困難と満足の関係, 日本看護学教育学会誌, 15 (1), p1-13, 2005.
- 7) 堤かおり・糸井裕子：臨地実習における学生カンファレンスの実態（その1）－カンファレンスで感じる困難と終了後の満足感－, 日本看護学教育学会第16回学術集会講演集, p 166, 2006.
- 8) 土井満美子：小児看護学実習における看護倫理の意識付け－点滴静脈内注射を受ける児に焦点を当てたテーマカンファレンスの効果－, 第35回看護教育, 142-144, 2004
- 9) 島田美鈴：成人急性期カンファレンステーマ提示の有無による学びの検討, 川崎医療福祉学会誌,17 (1) ,p97-105, 2007.
- 10) 舟島なをみ監修：看護実践教育のための測定用具ファイル第2版, 医学書院, p138-

139, 2009.

- 11) 舟島なをみ：質的研究への挑戦，医学書院，p45-49, 2000.
- 12) 舟島なをみ：看護教育学研究の成果に見る看護学実習の現状と課題，Quality Nursing,7(3), p202, 2001.
- 13) 中山登志子，定廣和香子，舟島なをみ：看護学実習カンファレンスにおける教授活動，看護教育学研究,12(1), p1-14, 2003.
- 14) 前掲13)
- 15) 前掲13)
- 16) 前掲9)
- 17) 齋藤玲子：授業としての臨地実習カンファレンスにおける学びと学生の傾向との関係，神奈川県立看護教育大学校看護教育研究収録，NO26, p 158-165, 2001.
- 18) 川本利恵子：効果的なカンファレンスの持ち方①カンファレンスの基礎知識と問題点，教務と臨床指導者,6 (1), 160, 1993.
- 19) 中山洋子：看護基礎教育のこれからの方向性，日本看護教育学会誌, 20(2), p52, 2010.
- 20) 前掲17)
- 21) 前掲13)
- 22) 川島みどり,杉野元子：看護カンファレンス,医学書院, p157-159, 2011.
- 23) 前掲8)

参考資料 テーマカンファレンス

「発達段階を考えたケア提供をどのようにしてゆくか」

- 1、実施日時：実習初日（原則月曜）のカンファレンス 15時～15時20分
- 2、対象学生：看護学部 第3学年 1グループ（4～6名）
- 3、指導者：教員2名
- 4、テーマ選定理由：小児は健康問題を持っていても、常に成長発達の過程にある。小児看護は子どもの特性を十分に理解し成長発達を阻害する因子を可能な限り取り除くことも重要な役割である。しかし、学生は疾患や病態の理解や、受け持ち患者の成長発達段階を捉え全体的に患者を把握することが難しい。さらに5日間という短期間であり、早期の気づきが全体像把握につながり、実習に役立てられると考え、実習初日にこのテーマを取り上げ、カンファレンスすることとした。
- 5、指導目標：1)小児にとっての成長・発達の重要性を理解することができる
2)受け持ち患児の発達段階を考慮することができる
3)成長・発達を考えたケアを考え実施することができる

時間	指導内容	設問及び内容	留意点
1分	1. テーマの確認	・初日に全日のテーマを伝える。 「小児は入院している現在も成長・発達の過程にあります。受け持ち患者はどのような成長・発達の段階でしょうか？」	・参加しやすい雰囲気 全員が発表できるようにする
5分	2. 発達段階の確認	「まず、各期の発達課題を確認してみましょう」 発達課題とは ：人間が健全で幸福な発達を遂げるために各発達段階で達成しておかなければならない課題。 乳児期 ：(信頼 vs 不信) ・母子の相互作用、生活環境の変化の適応・身体的・知脳機能の発達の著しい時期 幼児期 ：前期(自律性 vs 恥・疑惑)後期(積極性 vs 罪悪感) ・内的基礎・基本的、社会的な生活習慣の獲得、身体的な発達の著しい時 学童期 ：(勤勉性 vs 劣等感) 仲間意識 (ギャングエイジ) 身体的発育・発達、認知の発達、学習 思春期 ：(アイデンティティの獲得 vs 拡散)	・学生の発言を促す ・患児によっては、暦年齢と実年齢の発育発達に差異があることが認識できるよう、その年齢の患者の年齢時は少し詳しくする。
13分	3. 発表と討議 ①入院による影響 ②今後のケアを考える	①「自分の受け持ち患児はどうでしょう。疾患と合わせて、入院したことで、成長発達にどんな影響があると思いますか。」 ②治療と生活と、発達を考え、どのようなケアをしてゆくか、考えてみましょう	・年少の受け持ちの学生から指名する。 ・学生の受け持ち患者の説明が不足時は、必要な程度を考え情報を補足する。
1分	まとめ	「受け持ち患児の成長発達段階を把握し、学生としてどんなことに関わることができるか考え関わっていきましょう。」	結論としてまとめない。